

第 16 回女性文化研究賞の選考について

落合恵美子氏

『親密圏と公共圏の社会学：ケアの 20 世紀体制を超えて』有斐閣

(1) 選考経過および選考結果

「昭和女子大学女性文化研究賞」は、坂東眞理子昭和女子大学総長が著書の印税から寄贈した坂東眞理子基金を基に、本研究所が毎年行っている顕彰事業として、①男女共同参画社会形成の推進に寄与する研究 ②女性文化研究の発展に寄与する研究のいずれかに該当する単行本に贈られるものである。

第 16 回女性文化研究賞は、2023 年 1 月 1 日～12 月 31 日の 1 年間に刊行し、日本語で書かれた単著を対象に、昨年 12 月 1 日から本年 1 月 31 日まで候補作を公募した。

第 1 回目の選考委員会は、学内委員 8 名で本年 2 月 13 日に開催し、自薦 7 点、他薦 4 点（1 件重複）、選考委員推薦 12 点の計 22 点から 3 点を選考した。

第 2 回目の選考委員会は、学内委員 1 名と学外委員 2 名を加えた計 11 名で 4 月 11 日に開催し、最終 3 点から、落合恵美子氏（京都産業大学教授、京都大学名誉教授）の著書『親密圏と公共圏の社会学：ケアの 20 世紀体制を超えて』（有斐閣、2023 年 3 月 25 日）に「第 16 回昭和女子大学女性文化研究賞」を贈呈することに決定した。

(2) 受賞作の選考理由

本書は、ジェンダー、家族に関する我が国の社会学の第一人者である著者が 20 年来の論稿をまとめた論文集であり、近代家族論に関する長年の研究成果を、アジア、人口、歴史の 3 つの視点からバージョンアップした著者の社会学者としての研究成果の集大成といえる。アジア家族と親密圏に関するグローバル COE 代表としての成果もすでに公刊されているが、それをケアとグローバル化に注目して新たな視点を切り拓いており、落合社会学の体系を示した点で、受賞に値する大作である。

経済学などの社会科学で考慮されてこなかった「生とケア」をアジア、人口、歴史の視点から考察し、親密圏と公共圏の構造がいかに変遷してきたのかを明らかにするとともに、近代以降の形に過ぎない日本の性別分業が伝統的と誤解されてきた「近代の伝統化」であるにもかかわらず、その「誤解された伝統」に固執し、転換期に選択を誤ったことが、今日の日本の「人間の再生産の持続可能性」を損なったことを論じている。このことは、現下の日本の国家的課題、すなわち高齢者や子どものケア、人口減少、家族法の在り方などについて、戦後や 1980 年代に組み上げられた 20 世紀体制からの開放が必要だとする問題の提起や、今後の方向性への学術研究面からの寄与を高く評価されるべきといえる。

さらに、今日の「ケア」についての国境を越えた国際的関心が高く、特にアジア諸国と比較した本書の論考は、日本のみならず、今後急激な少子高齢化を迎えるアジアを含んだ多くの国々の政策立案に対しても、有益な示唆を与えている。

本書が研究者のみならず、政策立案者や一般の人々にも広く読まれ、次世代の日本のためのより良い政策選択に資することを強く期待する。